

災害リハビリテーションについて

名古屋掖済会病院

リハビリテーション部 副技師長 森 雅大

このたびの令和6年能登半島地震により尊い命を失われた方々に謹んで哀悼の意を表しますとともに、多くの大切なものを一瞬にして失い、今なお、大きな不安を抱えながら、厳しく、不自由な生活を強いられている被災者の皆様に心よりお見舞い申し上げます。

はじめに

いきなりですが、1ヶ月以上にわたる避難所での生活や断水生活を想像することができますか？
もし自分や家族、両親、祖父母が当事者となった場合、どのようなことが予想されますか？

近い将来、首都直下地震や南海トラフ地震の発生が予想されています。今年の能登半島地震をはじめ、近年立て続けに発生した大規模災害において、災害リハビリテーションの重要性と必要性が強く認識されるようになりました。2011年東日本大震災において発生した災害関連死者（建物の倒壊や火災、津波など地震による直接的な被害ではなく、その後の避難生活での体調悪化や過労などの間接的な原因で死亡された方）は3794人、2016年熊本地震においては218人と報告されています。災害発災後に生じやすい健康問題は、高血圧や脳卒中、心筋梗塞、深部静脈血栓症、肺塞栓症、肺炎、喘息、感染性胃腸炎、骨折、筋肉痛、関節痛といわれています。これらの問題の要因がストレスや安静、低栄養、悪環境、運動不足、転倒、筋力低下などで、リハビリテーション医療に緊密に関連しています。

災害リハビリテーションとは

超高齢社会となる我が国において、多発する災害時に起こる被災者・要配慮者等の生活不活発および災害関連死を防ぐために、リハビリテーション医学・医療の視点から関連専門職が組

織的に支援を展開し、被災者・要配慮者などの早期自立生活の再建・復興を目指す活動の全てを指します（2019年4月）。

JRATとは

JRATとは、一般社団法人日本災害リハビリテーション支援協会（Japan Disaster Rehabilitation Assistance Team）の略で、東日本大震災リハビリテーション支援10団体の活動経験を基に2011年4月13日に発足され、2020年4月1日名称変更と法人化がなされ、現在の団体となりました。

このJRATが提唱する災害リハビリテーションの考え方を医療・介護従事者のみならず地域住民へも着実に定着させるために、災害時には避難所環境整備、避難所のリハビリテーショントリアージおよび直接支援活動等を種々の災害支援関連団体との連携下で実施していく団体です。またJRATは“忘れた頃にやってくる禍”ではなく、“忘れる間もなくやってくる大禍”をモットーに①全国47都道府県でそれぞれ「地域JRAT設立」とブロック単位における情報共有・組織化、②都道府県行政およびDMAT（災害時医療派遣チーム）、JMAT（日本医師会災害医療チーム）等災害医療支援団体との協業体制の構築、更には、③平時からの教育・啓発・人材育成等に力を入れています。

能登半島地震での支援を経験して

1/1に最大震度7（マグニチュード7.6）の地震が石川県能登半島を襲いました。

1/6～1/11と、2/11～2/16の2回、職場より出張許可を得て、愛知JRATスタッフとして現地に向かい被災地支援に従事してきました。TVや新聞やインターネットでご覧になったと思われるが、今回の地震では津波や火災によって家屋の倒壊、道路網の寸断、断水・停電など能登半島の広域にインフラの崩壊が生じ、未曾有の被災地支援となりました。

現地では、石川県のJRATスタッフや他県から応援にきたJRATスタッフおよび他の災害医療支援団体と協力しながら避難者（所）情報やインフラ情報の集約、後方支援等を行っていました。しかし避難所にいる方だけでなく、現地で支援者となっている石川JRATのスタッフ自身も何らかの形で被災し、勤務先の業務もしなければならない状態でした。大規模災害の際は、被災県と

なった自県の支援者の健康面にも多大なる配慮が必要であったり、受援者側（応援・支援を受ける側）の体制作りも事前に備えるために整理しておく必要があることを身をもって体験させていただきました。

南海トラフ地震、首都直下地震に向けて

今後30年以内に70～80%の確率で南海トラフ地震が来るといわれていますが、当院もハザードマップによると、津波が到達する場所に位置していたり、液状化発生の可能性が高い地域に位置しています。その中でも災害拠点病院としての役目があるため、BCP（Business Continuity Planning；事業継続計画）や防災災害マニュアルを今一度見直す必要があります。

まとめ

近年、毎年のように起きている災害に対し、そして来るであろう大地震に備え、リハビリテーション医療の立場から、JRATという組織や災害リハビリテーションという概念が少しでも皆様に興味を持っていただければ幸いです。それらの災害を“忘れる間もなくやってくる大禍”ととらえ、皆様一人一人が他人事ではなく備えをし、有事の際は、お互いを助け合う気持ちを忘れずにいることが少しでも早く元の生活が戻れる近道となると思っています。

